

## いのちの喜びの祭典

### [聖書] ヨハネによる福音書 20章 11～18節

マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのであれば、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

### [序] 2020年のイースターを迎えて

4月、美しい季節ですが、新型コロナウイルスの感染が世界中に広がっています。今後ともまだどのようなようになるのか予断を許しませんし、毎日多くの死者も出ている、そんな言いようのない恐れや不安の中で、教会の歴史は今日、イエス様の復活を祝うイースターを迎えました。このことの意味を問わないではられません。

「イースター(復活節)」というのは、「いのちの喜びの祭典」だと思います。ちょっと抽象的に聞こえてしまうかも知れませんが、決して抽象的ではないと思うのです。私たちが日々、このように具体的に命を持って生きているというそのことが本当に神様に喜ばれ、祝福されていること、そのことをハッキリと示してくれた出来事が主イエス様の復活ということだと私は今年のイースター、そのことをまるで初めてのようには思われています。

### [1] 愛する者を生かすために

初めに少し小説の話をお許し頂きたいのですが、作家・重松 清さんの小説に『その日の前に』という作品があります。お読みになった方もいらっしゃるでしょうか。とても胸に迫るものがある作品です。若い仲の良い夫婦と二人の小学生の男の子の家族の物語です。小説は夫の「僕」の一人称の目線で描かれています。その妻の和美さんが癌の宣告を受け、召される「その日」のための準備をする、そして、とうとう「その日」を迎える。また「その日」の直後のことを描いているのです。私はその中の、妻の和美さんが既に死を覚悟し、入院中に夫に宛てて遺した手紙が、死後少し経ってから看護師さんが預かっていましたと渡されるのですけれども、その内容にとっても驚かされました。ただ一言だけが書かれているのです。…それは、<忘れてもいいよ>というものでした。—「忘れてもいいよ」。

「ちょっとクールすぎる」と思う方もおられるかもしれません。しかし、私は思うのです

が、これは、妻の和美さんは考えて考えて、胸が押しつぶされるような思いを抱いてやっと書いた一言だったのではないのでしょうか。すんなり受け入れられる言葉ではないでしょう。けれども、ここには途方もない愛が込められているのではないのでしょうか？—私にとって、あなたほど大事な存在はない。私は、あなたにはこれからも生きて行って欲しい、私のことでいつまでもメソメソするのではなく、あなたのいのちを生きて行って欲しい—そういう思いが込められているのではないかと私は思いました。最愛の妻がただ「忘れてもいいよ」と遺す一言は、或る意味、自分の命と引き換えにして、愛する者を生かす、前へと歩き出させる言葉になっている。そう思いました。

## [2] マグダラのマリアと主イエスの出会い

今日の聖書の箇所は、**マグダラのマリア**という女性と、復活された主イエス様との出会いの物語です。この素晴らしい物語は、もちろん小説の世界と同じように捉えることは出来ませんが、しかし、私はよみがえられた主イエス様とマグダラのマリアとの出会いの出来事は、私たちが、「死」に向かってではなく、自分の「命」の意味を受け止め直し、**本当の意味の「命」**の中に、自分の人生を大切に生きることへと促してくれる、そのようなメッセージがあるように思えるのです。

マグダラのマリアがどのような人であったのか良くは分かりません。**ルカによる福音書の 8 章**には「**七つの悪霊を追い出していただいた**」女性として書かれています。女性の人権などは社会的に無きに等しい時代にあって、しかも七つの悪霊に取りつかれていた者だったというのですから、周りの目は好奇心こそあれ、その孤独や惨めさ、苦しみや悲しみに共感して寄り添うような存在はいなかったと思います。売春婦のようなことをしていたのではないかと言う人もいれば、統合失調症に苦しんでいたのではないかという人もいます。しかし、このマリアは、イエス様と出会って、魂の平安を得たのだと思います。「私を知って、私という存在を受け容れて下さるお方がいる！」と、「七つの悪霊を追い出していただいた」マリアは、私はもうこのお方について生きてゆこう！と決心したのだと思います。

ですから、その主イエス様が、ボロボロになって**十字架**に架けられ、そこで遂に死んでしまわれたということはマリアにとって、**自分の全てが失われたような喪失感と絶望感**を与えたのではないのでしょうか。

今日の**ヨハネ 20 章 11 節以下**の箇所は、金曜日の夜に墓に葬られた筈の主イエスのなきがらが、日曜の朝になると、もう既に墓を塞ぐ石が取り除かれ、見当たらなくなっているという驚くべき事態に真っ先に出会い（マリアは誰かが取り去ったと思っている）、それを弟子のペトロたちの所に急いで行って告げ、再び墓の前に戻ってきた時のことです。マリアが出来ること、それはただ墓の前で泣くことだけでした。泣く以外何も出来ない。

しかし、復活祭のメッセージは、この「泣くしかない」所から始まるのです！もう一度この 20 章の 11 節から 14 節までをお読み致します。（20:11～14 を朗読）。

**墓**というのは、人間の命の最終地点だと言われたりします。つまり、「生きていた者はやがて死ぬ」ということを否応なく見せつけられる場所が「墓」であるとも言えます。**人生の矢印は、「命」⇒「死」**です。その先はありません。この時のマリアにとっても正にそうでした。あの愛するイエスは死んでしまった、私に残されていることは、このお方を丁寧に葬ることだ、そのことで何とか私は生きて行ける、思い出に縋って生きてゆける。そう思っていたの

ではないでしょうか。

その時に、驚く声をマリアは聞きました。初めは二人の天使の声であったとあります。その声は「婦人よ、なぜ泣いているのか」というものでした。マリアは「私の主が取りされました。どこに置かれているのか分かりません」と言いました。だから私は泣くしかない。そして彼女は、それまで墓の方を向いていた目を後ろに向けたのです。そこに何と主が立っておられました。しかし、不思議なことです、彼女にはその存在がイエスだと分からなかったとあります。何故でしょうか？ 彼女は言うなれば「**死人のイエス**」、「**死体のイエス**」を探そうとしていたのです。マリアは今「死」の虜になっています。詩編の中に「**主よ、愛する者も友もあなたはわたしから遠ざけてしまわれました。今私に親しいのは暗闇だけです**」という言葉がありますが（88 編 19 節）、この時のマリアは正にこのような中であつたと思います。彼女の目は「死」の力に捕えられ、命そのものが見えないのです。

そのような、死の力の中に泣くしかなかったマリアの目（霊の目を）を開いてくれたもの、それは“墓の中に座っていた天使”ではなく、墓とは反対側から語りかける“**立っておられる主イエス**”の語りかけでした。20 章 15 節以下です。（15～18 節を朗読する）。

はじめの内はまだマリアは、主イエスが分かりません。園丁だと思って、「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたか教えてください」と言っています。「どこに置いたか」と。主イエスはまだ「死体」なのです。生きている筈がない人なのです。きちんと葬り、その亡き人との出会いを握りしめて生きて行こうとしているマリアです。

### [3] 「いのち」の逆転

ところがです。ここで**逆転**が起こります。それは、固有名詞で語りかける主の声によるものでした。「マリアよ」。マリアの全人格にしみわたる声であつたと思います。何度も聞いた親しい声だったことでしょう。私は思うのですが、死というものの最も深い悲しみは、自分に向かって来る声をもう聞けなということだと思えます。マリアはここで自分へと語りかけて来る声を再び聴いたのです。「声」というのは**人格**です。そこには**命**が宿っています。その声にマリアは**方向転換**をしたのです。「彼女は振り向いて『ラボニ』と言った」。

そして主に「すがりつこう」としたのです。しかし主はマリアにこう言われました。「わたしにすがりつくのはよしなさい」。どういう意味か。恐らく、この時のマリアの中には、懐かしさもあつたと思いますが、それよりも大きかったのは、**後悔、悔いの大きさ**であつたのではないかと思うのです。彼女は他の女性たちと共にあの十字架の現場にまで行って、イエス様の最期の時を見ておりました。しかし遠くに立って、何も出来なかったのです。私を愛してくれたのに、私はあなたを見捨てた。その赦しを乞う思いです。…しかし主は、そのような自己後悔、ごめんなさいという思い、そういう思いを握りしめて過去の思い出の中に自分の居場所を持つこと、そのような**暗さにすがりつくことはやめなさい**、と語っておられるように思えて仕方ありません。

私も、身近な者の死を経験して少し分かる気がするのですが、見送ったその後に湧いてくるのは**後悔の思い**です。許してほしいという思いです。何と**愛が無い者**だったかということ突き付けられるのです。そのような涙というものは、ある時思いがけず溢れたりすることがあります。優しいからではありません。「罪」をつきつけられるからです。それは自分で

は処理出来ない思いです。…しかしそのような中にある時、よみがえりの主は、墓の方を向いている背後から私たちに声をかけ、「罪」や「死」ではなく、「わたしはよみがえりであり、命である」(ヨハネ 11:25 口語訳)とおっしゃるように、いのちそのもの、光そのものである主イエスの方に「向き」を変えさせて下さいます。「〇〇よ」と個人的に名前を呼んで！

#### 【結】 「わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる」

実はこの物語は、私はとても不思議な気持ちになるのです。イエス様は一度しっかりと(?)死んだ人ですよね。マリアの方は死んではいません。肉体的には。けれどもどうでしょう？逆さまになっていないでしょうか？—マリアの方はまるで暗闇だけが自分の居場所のように、墓から目を転ずることが出来ない、全く前途が見えない中にいます。他方、イエス様の方は、確かに死んだにも拘わらず、今は「いのち」の与え主として、死せるマリアに臨んでいるという、そういう構図です。どちらが生きてどちらが死んでいるのでしょうか？—実はこの構図、**私たち一人ひとりの人生のこと**なのではないでしょうか？ 私たちは本当に生きていると言えるのでしょうか？ いや、実は死んでいるのではないのでしょうか。本当に生きておられるのは、**ただおひとり、復活の主イエス・キリストだけ**なのではないでしょうか。その主が、死に打ち勝って、私に声をかけ、呼びかけて下さるのです！ その時に、私たちの中にその**神様の「いのち」**が、あの天地創造、初めの人間の創造の時のように吹き込んで再創造し、**喜びある命**に満たして下さるのだと思うのです。それが**今日イースターの朝に実現した**のです。

ですから、ヨハネ福音書にはこういう言葉もあります。主イエスの言葉です。—「**わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる**」(14:29)。主は言われるのです。「**わたしが生きているので**」と。これが、イースターの恵み、イースターの力です。

今のこのコロナウィルスが今後どのように展開するのか全く分かりません。恐怖がないと言ったら嘘になるでしょう。しかし主は私たちに約束して下さいました。肉体的な命を超えた霊的な命を、主は復活されて、私たちに確かなものとして与えて下さったのです。「**わたしを信じる者は、死んでも生きる**」(ヨハネ 11:25)と。今私たちは、死が支配する、罪の闇や死が勝利しているかのようなこの世にあって、神様のいのちを注がれて、**主イエス様に「生きよ」と声をかけられて生きているのです！**「〇〇よ、あなたの中にわたしの霊を注ぐ。赦しの霊を注ぐ。だから、心配せずに、あなたの隣人と共に生き、私の愛を証して行きなさい」とおっしゃって下さっているのではないのでしょうか。私たちが遣わされる場所、そこがどこであっても、そこに主ご自身が生きて働いていて下さっているのです。信じる者の人生の矢印は、命⇒死ではなく、死⇒命 です。イースター、おめでとうございます！

お祈り致します。—主よ、「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのはもはや私ではない。キリストが私の中にあるにあって生きているのである」と、パウロは喜びをもって告白致しました。今日、主イエス様の復活によって、私の罪はイエス様に、そしてイエス様のいのちは私の中に入ってくるという驚くべき交換が起こりました。ただ「アーメン」と受け取らせて下さい。この闇の中にある、前を向いて命の喜びに生きさせて下さい。

今日、この時、病や弱さに直面させられている者、人に言えない思いを抱えている者を格別に顧みて下さい。あなたが隣にいて下さり、あなたの温かい大きな御手で癒し、支え、また励まして下さい。私たちの教会のお互いが、今は直接会うことが出来なくても、いや、それだからこそ、お互いに覚え合い、祈り合ってゆくことが出来ますようにして下さい。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン！